



2021.12.1 No.86  
JA 静岡厚生連 清水厚生病院 医療協力部門

## 子宮頸癌とウイルス感染

### 〈子宮頸癌について〉

日本では毎年約 10,000 人の女性が子宮頸癌にかかり、約 3,000 人が死亡しています。2000 年以降は患者数・死亡数共に増加傾向にあります。以前は子宮頸癌の発症のピークは 40～50 歳代でしたが、最近では 20～30 歳代の若い女性に増えてきており、30 歳代後半に発症のピークがあります。

子宮頸癌のほぼ全てが HPV（ヒトパピローマウイルス）の感染が原因であることが解明されています。HPV は主に性的接触により子宮頸部に感染し、男性にも女性にも感染するありふれたウイルスです。性交経験のある女性の過半数は生涯に一度は HPV に感染すると言われていました。しかし HPV に感染しても約 90% の人においては免疫力により自然に排除され消失します。残りの約 10% の人は HPV 感染が長期間続きます。このうち自然治癒しない一部の人は異形成と呼ばれる前癌病変を経て数年以上かけて子宮頸癌に進行します。

子宮頸癌は通常、早期には自覚症状がほとんどありませんが進行するに従い、異常なおりもの、月経以外の出血、下腹部の痛みなどが現れてきます。これらの症状がある人は、婦人科に早期の受診をおすすめします。

### 〈HPV（ヒトパピローマウイルス）とは〉

HPV は皮膚および粘膜に感染する DNA ウィルスで、現在 200 種類以上の型が存在しますが、そのうち 10 数種類が癌を引き起こします。中でも HPV16、18、31、33、35、45、52、58 の 8 種類は子宮頸癌への関与が強く、日本国内では HPV16 型、18 型は子宮頸癌の原因の約 53% を占めています。

HPV は子宮頸癌の他にも、肛門癌、性器癌、頭頸部癌および良性の性器いぼを男女ともに引き起こすと言われていました。



HPV

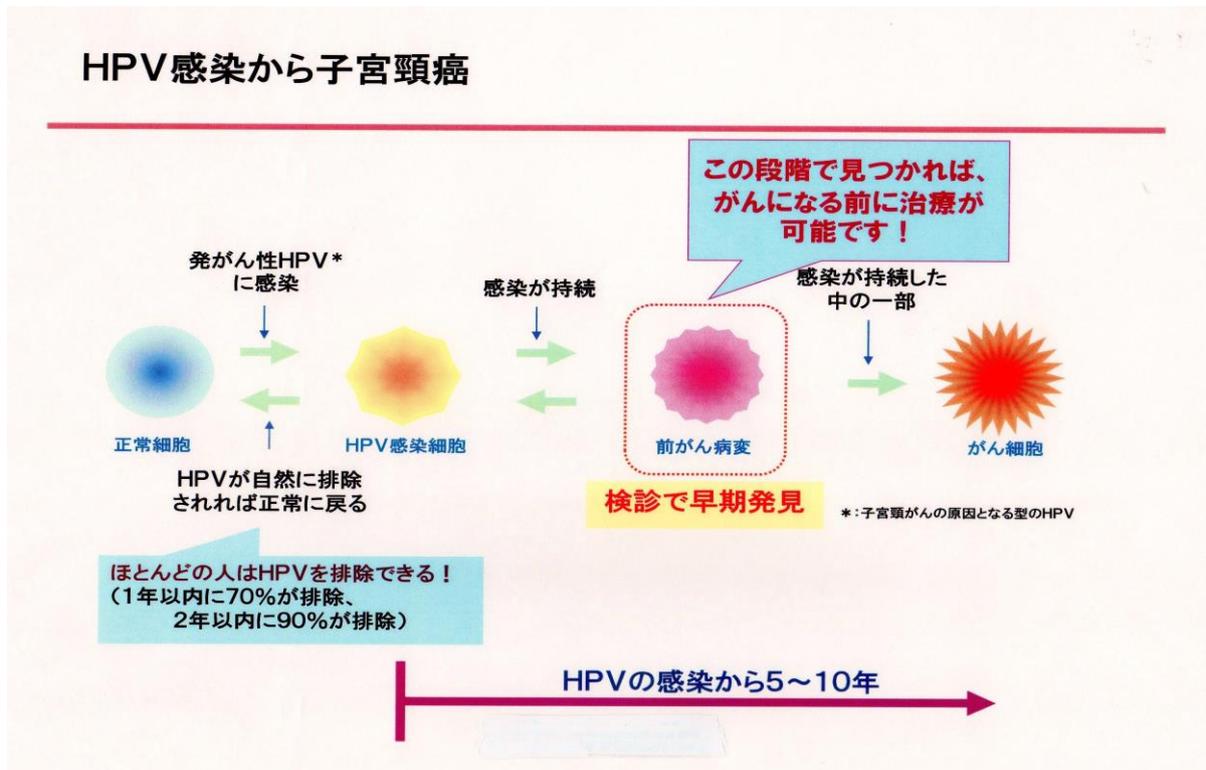
## 〈子宮頸癌を予防するためにできること〉

子宮頸癌の予防には、子宮頸癌検診と HPV ワクチンの 2 つが挙げられます。

### ・子宮頸癌検診

HPV に長期間感染し、自然治癒しない一部の人は異形成と呼ばれる前癌病変を経て、5 年以上かけて子宮頸癌に進行します。そのため HPV に感染し子宮頸癌になるまでの間に検査をすれば子宮頸癌になる前に発見することができ早期治療を行うことができます。

子宮頸癌検診は、子宮の入り口付近の頸部をブラシなどで擦って細胞を集め、顕微鏡を使って癌細胞や前癌細胞を見つける細胞診検査を行います。出血などの症状がなくても 20 歳を過ぎたら、2 年に 1 回の子宮頸癌検診を受けることが推奨されています。



### ・HPV ワクチン

先月、厚生労働省の専門部会は HPV ワクチンの積極的勧奨の再開を決定しました。

HPV ワクチンは子宮頸癌の約 53% を引き起こすとされる HPV16 型と 18 型の感染予防を目的としたものです。現在日本では定期接種できるワクチンとして 2 価と 4 価の HPV ワクチンが承認されています。2 価のワクチンは HPV16 型と 18 型に効果があり、4 価のワクチンは HPV16 型、18 型の他に良性の尖形コンジローマの原因となる HPV6 型と 11 型にも効果があります。

HPV ワクチンは HPV 感染後では効果を示さないため、11 歳から 14 歳の女子が対象となり、6 ヶ月間に 3 回のワクチン接種を行うことで十分な感染予防が望めます。しかし HPV ワクチン接種は予防効果の持続期間はまだ明確になっておらず、また他の型の HPV 感染には対応できないため、ワクチン接種後も 20 歳以降の子宮頸癌検診が奨められています。